

恋愛における告白の成否の規定因に関する研究

栗林 克 匡

目 次

問 題
方 法
結 果
考 察

問 題

青年期にある若者にとって、恋愛は最も関心の高い問題である。恋愛関係における研究は多岐に渡っているが (cf.松井, 1993), 松井 (1990) は、恋愛に対する態度や認知、異性選択と社会的交換、恋愛感情と意識、恋愛の進行と崩壊の4領域に分類している。告白の研究は の領域に関わっており、対人関係の親密化過程の中で捉えることができよう (親密化過程のレビューは大坊, 1990; 下斗米, 1996を参照)。関係の親密化過程のモデルとして、Levinger (1983) は対人関係の変化を、A: 知己になる段階、B: 関係の構築の段階、C: 持続の段階、D: 崩壊の段階、E: 終焉の段階の5段階からなるモデルを提出している。恋愛研究においては、DからE段階にあたる恋愛関係の崩壊、つまり「失恋」の研究はなされているものの (大坊, 1988; 飛田, 1989; 飛田, 1992; 栗林, 2001)、恋愛関係のごく初期の形成プロセスに関する研究は少ない。Levinger (1983) のモデルのA段階からB段階へ移行において、異性関係の場合には、同性友人の親密化過程とは異なり、

「告白」という手続きを伴うことが多々見受けられる。なお本研究では、栗林 (2002) に従い、恋愛における告白を「恋愛関係の形成を目的として、特定の相手に自分の好意を伝達する行為」と定義する。

我が国において恋愛における告白をテーマとした研究は多くはないが、大学生の恋愛観について検討した石川 (1994) の研究で、告白に関する意識が取り上げられている。この中で、恋人とのつき合いのきっかけが尋ねられており、「相手から告白された」が41.4%と最も多かった。また「自分から告白した」と答える割合は男性が34.2%、女性が10.4%と男性の方が多く、「相手から告白された」は男性が27.0%、女性が57.5%と女性の方が多かった。「告白」に関しては男性の方が積極的で女性は受け身といえよう。

山田 (1991) は相手を恋人と意識する時点を尋ねたところ、「相手に告白され、自分の中で好きだという気持ちのはっきりした時」「告白し、相手から好きだという返事もらった時」と回答する者が過半数を越えていた。また意思表示による確認の必要性について、「‘恋人になろう’という意思表示がなければ恋人とはいえない」かどうか尋ねたところ、5割以上の者が必要条件であると答えた。山根 (1987) は、記号学の立場から「恋人であること」を表す行為について大学生に調査したところ、「キスをする」「抱き合う」に続き「相手に好きだと言う」が挙がっていた。これらは恋愛関係の認識に告白が重要であることが伺える結果といえよう。

キーワード：告白、恋愛関係、状況、シャイネス、社会的スキル

栗林 (2002) は、大学生を対象に質問紙調査を行い、告白の状況に関する基礎的な特徴を検討している。この調査では7割以上の者が告白の経験があった。結果は、男性は4月・6月・7月・9月に、女性は2月・6月・8月・12月の告白が多い、告白の時間帯は16時と22~24時が多い、男性は女性に比べ公園や道端や車内など屋外で、女性は男性に比べ学校や飲食店など屋内で告白していた、

告白の2/3は直接会って口頭で述べられており、特に男性で8割以上に及んだ、男性は女性よりも「つきあって下さい」という交際申し込みを含んだ告白を行っていた、というものであった。

恋愛関係の進展に影響する告白の効果に着目した研究として、樋口・磯部・戸塚・深田 (2001) が挙げられる。彼らは恋愛関係における告白の言語的方策を明らかとし、その方策の有効性に関して状況要因を交えながら検討した。言語的方策は、「つきあって下さい」に先行する言葉として、「好きです」など好意の伝達を単純に行っている「単純型」、
「一生のお願いだから」「君がいないとダメなんだ」など相手の必要性を強調したり交際を懇願する「懇願型」、
「さんと話をするだけで幸せになる」など相手といるときの自分の気持ちや相手の魅力を説明する「理屈型」の3タイプにまとめられた。そして、両思い状況で告白した方が、片思い状況でよりも関係が進展しやすい、単純型の告白を用いた場合に最も関係が進展しやすい、単純型告白方策の効果の優位性は、状況(恋人や好きな人の有無・告白回数・被告白回数)および性別を問わないことが明らかとなった。

告白者の印象についての研究も行われている。橋本 (2002) は仮想の片思い物語を呈示し、物語に登場する求愛(告白)者とその求愛を断る者(拒絶者)に対する対人認知を検討した。その結果、拒絶者に比べ求愛者は積極性や意欲など力本性が高く評価され、分別

や慎重さといった社会的望ましさは低く評価された。また特に男性求愛者は個人的親しみやすさが低く評価された。ただし、ここで呈示された物語は、拒絶後も相手を追いかける諦めの悪い内容であり、このことが否定的印象をもたらした可能性は考慮する必要がある。

告白の個人差に関する研究としては、栗林 (2002) は、シャイネスと社会的スキルを取り上げており、シャイネスの高い者・社会的スキルの低い者は告白の回数が少なく、告白時に否定的感情を伴いやすいことが分かっている。菅原 (2000) も、個人差変数を取り上げつつ、恋愛における告白行動の促進・抑制について検討している。この研究では、告白行動において、「関係形成の期待」と「拒絶される懸念」の2つの心理的要因を仮定し、前者は告白を促進し、後者は抑制することを見いだした。また関係形成の期待は相手への愛情度や承認獲得欲求と関係があり、拒絶される懸念は拒否回避欲求や対人不安傾向などと関係があることも示された。

上述のような知見が提出されてきているが、告白の成功(告白を経て恋愛関係が形成されること)に付随する告白時の状況の特徴や個人差については十分な検討がなされていない。そこで本研究では恋愛における告白の成否を規定する要因について検討する。規定因として、告白時の状況、告白までの期間、告白までの交際内容、告白の受容可能性、告白・被告白者の恋愛感情の強さ、告白者の特性(シャイネス・社会的スキル)を取り上げる。

シャイネス(shyness)に関する研究は、Zimbardo (1977) の研究を契機に発展を遂げてきている。相川 (1991) は、シャイネスを「特定の社会的状況を越えて個人内に存在し、社会的不安という情動状態と対人的抑制という行動特徴をもつ症候群」と定義し、特性的なシャイネスを測定する尺度を開発した。シャイネスの高い者は、主張性の欠如や意見表明困難性、他者が存在するところでの意思伝達

や思考の困難性などを引き起こす (Zimbardo, Pilkonis, & Norwood, 1975)。これらの行動特徴から、シャイネスの高い人は告白するという点に関しても、相手に自らの好意の気持ちを伝えることが困難であり、相手が好意を受け止められないため、失敗しやすいと予測される。

本研究では告白と社会的スキル (social skills) との関連も検討する。社会的スキルとは、「円滑な対人関係を実現するために用いられる熟練した認知や行動の集合体」である (栗林, 2002)。堀毛 (1991) によると、社会的スキルは「表に現れた行動」「中範囲の能力概念」「高次の抽象過程」の3つのレベルに分類できるが (Spitzberg & Cupach, 1989)、第1のレベルの「行動」は、様々な社会的場面を円滑かつ正常に処理し、課題解決や目標達成につながる行動を意味するとしている。ここに着目した堀毛 (1994) は「記号化」「解読」「統制」3つの基本スキル因子を測定する尺度 (ENDE2) を作成している。本研究では、特に「記号化」スキルに注目する。記号化能力の高い人は、自分の感情・態度などを、様々なチャンネルを通じて外部に表出する能力に長けている (堀毛, 1991)。この記号化スキルに長けた者は、「告白」を通じて自分の気持ちを相手に十分伝達できるため、成功しやすいと予想される。

方法

被験者：

高校生158名 (男性70名, 女性88名), 大学生207名 (男性133名, 女性74名)。平均年齢は高校生が15.94歳, 大学生が18.98歳であった。なお調査は2002年7月下旬から10月上旬にかけて行われた。

質問紙の構成：

告白経験：

告白の有無を尋ねた。告白経験のある者は

その回数も尋ねた。

最近の告白の実態：

栗林 (2002) で使用された項目を参考に、知り合ってから告白までの期間 (月単位)、告白時間、告白場所 (自宅, 学校, 道端など)、告白方法 (直接口頭, 電話, 手紙など)、告白内容 (好意の伝達・交際申し込みなど) を尋ねた。また、告白までの交際行動は松井・戸田 (1985) の交際行動項目を参考に作成した33項目について経験の有無を尋ねた。

その他に、告白時の相手の交際状況 (恋人がいた・失恋直後・片思い中など)、告白の受容可能性 (%), 告白時点での両者の恋愛感情の強さ (%) を尋ねた。

告白の結果：

告白後、「恋人関係になった」「友人関係になった」「関係が完全になくなった」「変化なし」かを尋ねた。

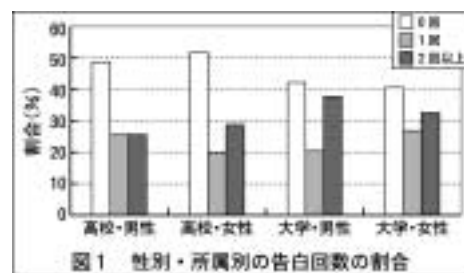
個人特性：

相川 (1991) の特性シャイネス16項目5段階尺度と堀毛 (1994) のENDE2より記号化スキル4項目5段階尺度を用いた。

結果

1. 告白経験の有無

告白経験について性別 (男・女)・所属 (高校・大学) 別にクロス集計を行った。高校男性36名 (51.42%), 高校女性42名 (48.28%), 大学男性77名 (57.89%), 大学女性44名 (59.46%) が告白経験者であった。性別・所属による告白回数の違いはなかった (図1)。



2. 告白の成否の規定因

本研究では、告白の結果「恋人関係になった」場合のみ告白の成功とみなし、以下の要因との関連を検討した。

告白経験者の基本的属性

告白経験者について、告白の成功率を性別・所属別に求めたところ、高校男性は52.78%、高校女性は48.72%、大学男性は64.86%、大学女性は57.14%であった。条件による成功率に有意な偏りはなかった。

告白までの期間

知り合ってから告白までの期間を「3ヶ月以内」「4～6ヶ月」「7～12ヶ月」「13ヶ月以上」に分け、期間×成否の²検定を行った(表1)。その結果、成功群は3ヶ月以内の告白が41.24%と最も多かったが、失敗群は1年を越えてからの告白が50.72%と最も多かった($\chi^2(3)=9.47, p<.05$)。

また、告白までの期間を平方根変換し、告白の成否を要因とするt検定を行ったところ、成功群(2.86)の方が失敗群(3.79)よりも有意に短かった($t(164)=2.75, p<.01$)。

表1 告白までの期間

	～3ヶ月	4～6ヶ月	7～12ヶ月	13ヶ月～	計
成功群	40(41.24)	9(9.28)	14(14.43)	34(35.05)	97
失敗群	13(18.84)	9(13.04)	12(17.39)	35(50.72)	69

$\chi^2(3)=9.47, p<.05$

告白までの行動

知り合ってから告白時点までの交際行動33項目について告白の成否別に経験率を求めた(表2)。各項目の経験の有無×告白の成否の²検定の結果、告白の成否の差が1%水準でみられた交際行動は、「二人で遊びに行く」「二人で食事に行く」「相手の買い物に付き合う」「親に紹介」「ペッティングをする」であった。いずれも成功群の方が経験率は高かった。

また、交際行動項目に対し「経験なし」に

表2 告白時の交際行動経験率(%)

	失敗群	成功群	
友人や勉強の話をする	71.95	84.68	*
特別な用がないのにメール	42.68	55.86	+
相談事を聞いてあげる	43.90	52.25	
子どもの頃の話をする	37.80	48.65	
お互いの家族の話をする	37.80	47.75	
グループで遊びに行く	35.37	38.74	
肩をたたいたり、体に触れる	36.59	36.94	
個人的な悩みをうちあける	30.49	37.84	
二人で遊びに行く	21.95	41.44	**
特別な用がないのに電話	25.61	33.33	
仕事や勉強を手伝う	25.61	31.53	
寂しい時、話を聞いてもらう	20.73	30.63	
二人で食事に行く	10.98	35.14	***
グループで食事に行く	19.51	21.62	
プレゼントを贈る、贈られる	20.73	19.82	
お互いの家へ遊びに行く	12.20	26.13	*
特別な用がないのに会う	9.76	22.52	*
手を握ったり腕を組む	8.54	17.12	+
相手の買い物に付き合う	2.44	19.82	***
キスしたり、抱き合う	9.76	14.41	
相手と口げんかする	13.41	9.01	
BF・GFとして周りに紹介	7.32	8.11	
親に紹介	1.22	10.81	**
ペッティングをする	0.00	11.71	**
恋人として周りに紹介	2.44	9.01	+
結婚の話をする	3.66	8.11	
性交する	1.22	9.91	*
別れたいと思ったことがある	2.44	8.11	+
相手を殴ったことがある	3.66	4.50	
結婚を相手に求めた	0.00	5.41	*
二人だけで旅行に行く	0.00	4.50	+
結婚しようとする	1.22	3.60	
結婚相手として親に紹介	0.00	0.00	

*** $p<.001$ ** $p<.01$ * $p<.05$ + $p<.10$

0点、「経験あり」に1点を与え、33項目の合計点を求めた。この得点について、告白の成否を要因とするt検定を行ったところ成功群(8.09)の方が失敗群(5.61)よりも有意に多くの交際行動を経験していた($t(190)=3.23, p<.01$)。

告白時の物理的状況：告白時間・場所・方法

まず告白の時間帯を「0～5時」「6～11時」「12～17時」「18～23時」の4つの時間帯に分け、告白の成否別の割合を求めた(表3)。その結果、成功群の半数が夜に告白をしていたが、失敗群では夜は3割程度で、昼から夕方にかけての割合が高かった($\chi^2(3)=6.86, p<.08$)。

表3 告白の時間帯

	0~5時	6~11時	12~17時	18~23時	計
成功群	12(14.29)	6(7.14)	24(28.57)	42(50.00)	84
失敗群	7(11.11)	8(12.70)	28(44.44)	20(31.75)	63

$\chi^2(3)=6.86, p<.08$

次に告白の場所を「自分の家」「相手の家」「学校」「道端」「公園」「車内」「その他」に分け、告白の成否別の割合を求めた(表4)。統計的に有意な偏りはみられなかったが、失敗群は学校といった手近な場所が多く、告白場所を積極的に選んではいないようである。

そして告白の方法について、「対面」「電話」「手紙」「メール」「その他」に分け、告白の成否別の割合を求めた(表5)。両群とも直接対面での告白が過半数を占めたが、手段については有意な偏りはみられなかった。なお、栗林(2002)の結果と比べるとメールによる告白の割合が増加しているようである。

告白内容

告白内容×成否の χ^2 検定の結果(表6)、失敗群に比べ成功群は「つき合ってください」といった交際の申し込みを含んだ告白内容の割合が高かった($\chi^2(4)=12.22, p<.05$)。

告白の受容可能性

相手が告白を受け入れてくれる可能性について、告白の成否を要因とするt検定を行ったところ(表7)、成功群(61.39)の方が失敗群(37.65)よりも有意に高く可能性を見積もっていた($t(187)=6.67, p<.01$)。

表4 告白の場所

	自分の家	相手の家	学校	道端	公園	車内	その他	計
成功群	21(25.30)	8(9.64)	14(16.87)	14(16.87)	6(7.23)	7(8.43)	13(15.66)	83
失敗群	16(24.62)	5(7.69)	18(27.69)	13(20.00)	4(6.15)	1(1.54)	8(12.31)	65

$\chi^2(6)=5.89, n.s.$

表5 告白の方法

	対面	電話	手紙	メール	その他	計
成功群	61(54.95)	23(20.72)	3(2.70)	23(20.72)	1(0.90)	111
失敗群	43(52.44)	21(25.61)	6(7.32)	11(13.41)	1(1.22)	82

$\chi^2(4)=4.18, n.s.$

表6 告白の内容

	好意	交際	好意+交際	遠回し	その他	計
成功群	32(28.83)	17(15.32)	47(42.34)	15(13.51)	0(0.00)	111
失敗群	30(37.04)	7(8.64)	26(32.10)	12(14.81)	6(7.41)	81

$\chi^2(4)=12.22, p<.05$

告白時の自他の恋愛感情の強さ

恋愛感情の強さを、完全に高まった状態を100として現在の状態がどのくらいの割合(%)なのかを回答させた(表7)。自分の恋愛感情の強さについて告白の成否を要因とするt検定を行ったところ成功群(78.65)と失敗群(80.49)で有意な差はみられなかった($t(191)=0.61, n.s.$)。相手の自分に対する恋愛感情の強さの推測については、失敗群(34.32)の方が成功群(61.08)よりも有意に低く見積もっていた($t(190)=7.37, p<.001$)。

表7 受容可能性および自他の恋愛感情の強さの平均値とt値

	成功群	失敗群	t値
受容可能性	61.39 (25.41)	37.65 (22.54)	6.67**
自分の恋愛感情の強さ	78.65 (21.97)	80.49 (19.11)	0.61
相手の恋愛感情の強さの推測	61.08 (26.23)	34.32 (22.86)	7.37***

** $p<.01$ *** $p<.001$

告白時の相手の交際状況

告白時の相手の交際状況について、告白の成否別に割合を求めた(表8)。失敗群に比

表 8 告白時の相手の交際状況

	恋人がいた	失恋したばかり	誰かに片思い	何ものなし	わからない	その他	計
成功群	4(3.60)	7(6.31)	7(6.31)	57(51.35)	26(23.42)	10(9.01)	111
失敗群	3(3.66)	0(0.00)	21(25.61)	28(34.15)	28(34.15)	2(2.44)	82

$\chi^2(5)=25.67, p<.001$

べ成功群では、相手は「特に何ものなし」という割合が高く、また「誰かに片思い中」という割合が低かった ($\chi^2(5)=25.67, p<.001$)。

3. 告白と個人特性（シャイネス・記号化スキル）

告白経験なし群、告白失敗群、告白成功群のシャイネスと記号化スキルの程度が異なるのかを検討するために、1要因の分散分析を行った(表9)。まずシャイネスの程度については、群間の主効果が有意($F(2,345)=8.58, p<.001$)で、告白成功群(43.15)の方が告白経験なし群(48.57)よりもシャイネスが低かった。

記号化スキルの程度についても、群間の主効果が有意($F(2,344)=9.73, p<.001$)で、告白成功群(13.96)および告白失敗群(13.72)の方が告白経験なし群(12.45)よりもスキルが高かった。告白の成否でシャイネス・記号化スキルの違いは特にみられないが、告白経験の有無において違いが現れている。

表 9 告白条件別のシャイネス・記号化スキル得点の平均値とF値

	告白経験なし	告白失敗群	告白成功群	F値
シャイネス	48.57 (10.94)	45.64 (10.13)	43.15 (10.29)	8.58***
記号化スキル	12.45 (3.03)	13.72 (2.84)	13.96 (3.01)	9.73***

*** $p<.001$

考 察

本研究では恋愛における告白の成否と、告白時の状況、告白までの期間、告白までの交際内容、告白の受容可能性、告白・被告白者

の恋愛感情の強さ、告白時の相手の交際状況そして告白者の特性（シャイネス・社会的スキル）との関係を検討した。告白の成功者の特徴を、知り合ってから告白に至るまでの期間におけるポイントと、告白を行う当日のポイントに分けてみていく。

まず知り合ってから告白に至るまでに着目すると、成功者の多くが知り合ってから3ヶ月以内に告白しており、二人で遊びや食事や買い物に行くなど二人きりになる交際行動を経ていた。これは松井(1990)の恋愛行動の進行に関するモデルでいえば、第2段階以降にあたる行動である。また成功者は、告白を相手が受け入れる可能性を十分高く認知し、相手の恋愛感情の強さを高く推定していた。これらのことから、短期間の内に一気にお互いの恋愛感情を高め、二人だけの行動を行う実績づくりが重要であるといえよう。また、成功者は相手が告白を受け入れるであろうと知っていることから、「ダメでもともと」「当たって砕けろ」「一か八か」という意識は薄いように思われる。受容可能性を高く見積もれるということは、告白までの期間で十分な関係を相手との間に形成できていることを意味する。成功者の告白は、告白により「無関係」から「恋愛関係」へと関係の一変を図るというよりも、2者が既に形成している関係を「恋愛関係」へと昇華・明確化させるために行われると考えられる。

次に告白当日の状況に着目すると、告白時に「(恋人として)つき合ってください」と交際の申し込みをはっきり伝えることが成功者のパターンとして現れた。明確に自分の意向を伝え、相手に理解させることが重要であ

る。また成功者の多くは、告白を夜に行っており、ムード作りもある程度必要かもしれない。ただし、夜という時間帯に2人だけで会うということ自体、ある程度の親密な関係が既に形成されていることの証拠ともいえる。

ところで本研究では告白者の特性（シャイネス・社会的スキル）と被告白者の交際状況も取り上げた。予想と異なり、告白の成功群と失敗群との間にシャイネスやスキルの程度に差はみられなかった。しかし告白の経験の有無において告白者の特性の有意な差がみられており、まず告白というアクションを起こす上でシャイネスが低く、スキルに長けていることが重要であることが分かる。また被告白者側が誰も交際しておらず、片思いもしていない場合に告白は成功しやすいことが確認できた。

恋愛における告白の成否の規定因は複雑であり、今後さらなる検討が望まれる。告白者側の規定因として、以下のようなことが挙げられる。出会いの初期の段階においては身体的魅力の影響は大きく、告白者が魅力的であれば成功の可能性も高くなるかもしれない。また、一度の告白の失敗にめげずに何回もアタックする積極性や陰湿な感じを与えない明朗性なども成否に作用すると考えられる。被告白者側の規定因として、告白時の感情状態（落ち込んでいた、気分がよい）、押しへの弱さ（断りにくい性格）が挙げられる。これらの場合、告白を受容しやすくなると考えられる。またそれら告白成否の規定因と恋愛関係成立後の満足度や関係維持の状態との関連性を検討することも必要であろう。

本研究の一部は、日本社会心理学会第44回大会で発表された。

本研究の実施にあたり、高山葉子氏の協力を得ました。記して感謝いたします。

〔引用文献〕

- 相川充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究, 62 (3), 149-155.
- 大坊郁夫 1988 異性間の関係崩壊についての認知的研究 日本社会心理学会第29回大会発表論文集, 64-65.
- 大坊郁夫 1990 対人関係における親密さの表現 - コミュニケーションにみる発展と崩壊 - 心理学評論, 33 (3), 322-352.
- 橋本剛 2002 片思いの求愛者と拒絶者に対する対人認知-仮想場面法による第三者評定- 対人社会心理学研究, 2, 15-23.
- 飛田操 1989 親密な対人関係の崩壊過程に関する研究 福島大学教育学部論集 (教育・心理部門), 46, 47-55.
- 飛田操 1992 親密な関係の崩壊時の行動特徴について 日本心理学会第29回大会発表論文集, 231.
- 樋口匡貴・磯部真弓・戸塚唯氏・深田博己 2001 恋愛関係の進展に及ぼす告白の言語的方策の効果 広島大学心理学研究, 1, 53-68.
- 堀毛一也 1991 社会的スキルとしての思いやり 現代のエスプリ, No.291, 150-160.
- 堀毛一也 1994 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル 実験社会心理学研究, 34 (2), 116-128.
- 石川英夫 1994 大学生の恋愛観 東京経済大学人文自然科学論集, 98, 53-79.
- 栗林克匡 2001 失恋時の状況と感情・行動に及ぼす関係の親密さの影響 北星論集 (社会福祉学部), 38, 47-55.
- 栗林克匡 2002 恋愛における告白の状況と個人差 (シャイネス・社会的スキル) に関する研究 北星論集 (社会福祉学部), 39, 11-19.
- 栗林克匡 2002 ソーシャル・スキルとトレーニング 津村俊充 (編) 子どもの対人関係能力を育てる 教育開発研究所, 144-147.

- Levinger,G. 1983 Development and change. In H.H. Kelley, R.Berscheid, ACristensen, J.H.Harvey, T.L. Huston, G.Levinger E.Mcclintock, L.A.peplau, & D.R.Peterson (Eds.) *Close relationship*. W.H.Freeman & Company, 315-359.
- 松井豊 1990 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33 (3), 355-370.
- 松井豊 1993 恋ごろの科学 サイエンス社
- 松井豊・戸田弘二 1985 青年の恋愛行動の構造 について (2) 日本心理学会第49回大会 発表論文集, 427.
- 下斗米淳 1996 「対人関係の親密化」研究の展望 : 理論的枠組みの検討 専修人文論集, 58, 23-49.
- Spitzberg,B.H. & Cupach,W.R. 1989 *Handbook of interpersonal competence research*. NY:Springer.
- 菅原健介 2000 恋愛における「告白」行動の抑制と促進に関わる要因 - 異性不安の心理的メカニズムに関する一考察 - 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 230-231.
- 山田昌弘 1991 現代大学生の恋愛意識 「恋愛」概念の主観的定義をめぐって 昭和大学教養学部紀要, 22, 29-39.
- 山根一郎 1987 「恋人」という間柄を意味する諸行為の記号学的分析 社会心理学研究, 2 (2), 29-34.
- Zimbardo,P.G. 1977 *Shyness:What it is, what to do about it*. Massachusetts : Addison-Wesley. (木村駿・小川和彦 (訳) 1982 ジンバルドー, P. G. シャイネス 頸草書房)
- Zimbardo,P.G., Pilkonis,P.A., & Norwood,R.M. 1975 The social disease called shyness. *Psychology Today*, 8, 68-72.

[Abstract]

The Determinants of Success or Failure of Declarations of Love

Yoshimasa KURIBAYASHI

This study examines the determinants of success or failure of declarations of love. The participants, 158 high school students (70 males, 88 females) and 207 undergraduates (133 males, 74 females), were asked about their experiences of confessing love, the situations (time, place and method) of the confession, the results of the confession, and their degree of shyness and social skills. The results were as follows. 199 participants experienced confessions, and about 60% of them were successful. A successful confession means that the persons formed a romantic relationship after the confession. Over 50% of the people who failed were found to have made confessions one year or longer after they first met. On the other hand, 41.24% of the successful people made confessions within three months after they first met. The successful group had more experience than the unsuccessful group "to go and play together", "to go out for dinner together", "to go shopping together", "to introduce the partners to their parents" and "to do petting" before the confession. Half of the successful people made their confession at night. The successful group used expressions which included "please be my steady" more frequently. The successful group estimated that both the possibility of acceptance and the target's intensity of romantic love were high. There was no difference in the degree of shyness and social skills between the successful and the unsuccessful groups, though the group with no-experience of confession was shyer and less skillful than the group who confessed.

Key words: declaration of love, romantic relationships, situation, shyness, social skills

